

* 新武蔵野物語に出てくる東京天文台

アーカイブ室新聞 (2010年7月9日 第360号) に「武蔵野の天文台」という記事を書いた。この記事は、三鷹市大沢の歴史研究家の榛沢茂量氏が三鷹光器会長の中村義一氏にこの文章に出てくる「営繕の方」は、中村氏の父上ではないかと持ち込んだものを、中村氏が昭和のはじめ頃の天文台の様子が詳しく書かれているからと、アーカイブ室の筆者に届けてくれたものであった。その中には現在の国立天文台の者には知りえない貴重な情報が含まれているので、全文を引用させていただき記事にした。その時には、この文章の著者、史料名などは不明のままであった。この「武蔵野の天文台」という記事の出所が分かったと榛沢氏から知らせがあり、昭和11年(1936年)5月発行の白石實三著「新武蔵野物語」であることが分かり、国立天文台の図書室司書の力を借りて、法政大学図書館から「新武蔵野物語」を借り出して眺めてみると、この本は実に面白い記事が満載されたもので、「武蔵野の天文台」という記事の他に、ずばり「東京天文台」という項があるので驚いた次第である。この「新武蔵野物語」が書かれたのが昭和11年、著者の白石實三氏が亡くなったのが昭和12年(1937年)であるから、著作権の縛りが無いことが分かり、存分に史料として使わせていただく。この「新武蔵野物語」は随筆という範疇にはいるものと思うが、観山台長の指示である「国立天文台が登場する書物を集めろ」という趣旨から、筆者は古書店からこの書物(写真1)を入手した。



写真1 昭和11年発行の「新武蔵野物語」

著者の白石實三(明治19年(1886年)~昭和12年(1937年))は明治・大正・昭和期の

小説家、随筆家で、その墓所は国立天文台に程近い多摩霊園にある。氏は群馬県碓氷郡安中駅伝馬町出身。早稲田大学英文科卒業後、同校法科・東京外語学校露語科に学んだとある。大正5年（1916年）に武蔵野会の設立、武蔵野の地誌、歴史に関心をもち、『武蔵野巡礼』、『大東京遊覧地誌』、『新武蔵野物語』などの著作がある。今回は、「新武蔵野物語」にある「東京天文台」の項を全文引用して紹介したい。以下引用（現代仮名遣いにした）。

東京天文臺

もう何年前だったか、若かった私は、武蔵野に絶える尾花の美のなごりをたずねて、泊りがけで武蔵野を歩いたことがあった。そのとき、はからずも天文台をたずねて、尾花の美の極致を見たが、その夜は、技師に頼んで、子午儀室に一夜を明かした。

ちょうど晩秋の晴れた夜のことで、子午儀室の望遠鏡にははっきりと星の光りが映った。その光りの色の美しかったこと！ なつかしかったこと！ 私はおそらく生涯、あの夜見た星の色、星の光りの美をわすれないかも知れない。今、地質時代の武蔵の東京を語りながら、またしても、あの夜のことを思い出した。

思いだしながら、書いてゆく・・・・・・・・

地球の歴史は、一口に一億年といわれている。或いは六七千萬年ともいわれている。それが今から二千萬年の何千萬年という長い歲月、関東は一かたまりの山塊だった。それが後に陥没して、海となった。海波は、ただちに秩父に迫って、激浪は秩父山の麓に高く波打ちつつあったのだ。秩父を超えて、今の南群馬方面まで入り込んで、そこに、氷河の作用ではないかと思われるような峡谷を作った。

それからまた一千万年。突如、海底に大火山が爆発したかと思うと、陸地が出来た。つづいてまた次の火山の爆発・・・陸地。その聖地が、今の武蔵野の赤土層下に堆積する武蔵野系統というもので厚さ数千尺、百万年以前のものともみなされているが、数千尺といえは、何百万年かかって積もったものであろう。

それから、またも陥没して海となった。隆起して、陸となった。今の東京湾ができ、霞ヶ浦が水として残った。巨象が徘徊したのは、おそらくこの時代で、すなわち洪積期、何十万年の遠い以前のことである。

徳川時代、江戸の築地工事などは、この自然的大作業にくらべては、大海の一滴の価値すらない。だが、自然的大作業の方は、ふだんは極めて徐々で、仮りに人間がいたと仮定しても、その眼にははまらないほど、隠微な作用で行われて行った。風にくづれる岩、雨に溶ける砂、風波のいとなみは、それこそ軽微なもので、江戸の築地工事や、昭和の復興工事にくらべては、大海の一滴ほどの価値すらないものであった。しかも、一粒の砂の動き、一滴の雨の働きが、積み積って、関東の陸地をなし、東京湾をつくったのであった。

突如として、陸上に大変動があった。火山が爆発したのだ。それが那須か、日光か、赤城か、榛名か、または一部の人の説くように秩父か、それとも富士か、とにかく想像も及ばないほど恐ろしい猛烈な火山の爆発があつて、今の武蔵野のローム——赤土層ができ

たのである。

武蔵野ができたのである。

人類が住むようになったのは、それからまだまだ何万年の後のことであった。赤土のほんの上の上から、原始人の遺物が出て来るのである。

そうであろう、武蔵野ができてからさえ、数十万年の歳月がたつ。それから百万年、一千万年、数千万年。武蔵の東京の歴史は、さかのぼれば、ただちに地球のそれと相通じているのだ。

ただ永劫なる時の流れ・・・・武蔵の東京の過去を語った私は、将来を想像する勇氣はない。微々たる人間のつかみが「明日の社会」「明日の人類」を語ったところが、所詮、何になろう。私は、晴れた夜の下、きらめく星の下に、ただうなだれて死滅を待つばかりである。